

ヘダ号とプチャーチン ゆかりの史跡を訪ねる



宝泉寺
プチャーチンの宿泊所
ディアナ号水兵の墓所



宝泉寺境内 ディアナ号水兵の墓



造船記念碑
ヘダ号建造の地をしるす



大行寺 日露条約修正交渉の舞台

交通のご案内



- JR／小田急線
小田急新宿駅……沼津駅……沼津港
船30分 戸田港
- JR新幹線
……三島駅……修善寺駅……戸田港
電車35分 バス60分
- 自家用車
沼津インター……沼津市古宇……戸田(75分)
沼津インター……沼津市大瀬崎……戸田(85分)
三島……修善寺……戸田(70分)
- フェリー／自家用車
清水港……土肥港……戸田(65分/25分)

- 戸田港(中央桟橋)から博物館まではタクシーで5分、徒歩で30分
- 博物館前の駐車場まで大型バス進入可能



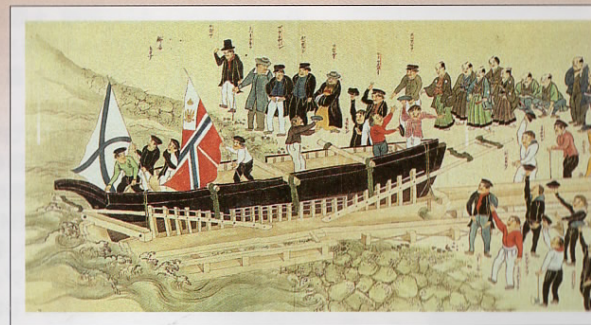
沼津市戸田造船郷土資料博物館 駿河湾深海生物館

〒410-3402 静岡県沼津市戸田2710-1
TEL・FAX 0558-94-2384

- 開館時間 午前9時～午後5時(最終入館は4時30分)
- 入館料 大人300円 小人100円
- 休館日 毎週水曜日・祝日の翌日
- 年末12/29～1/1休館 新年は1月2日より開館
- 団体 20人以上2割引

沼津市

戸田造船郷土資料博物館 駿河湾深海生物館



ヘダ号進水式の図



日本近代造船史の扉を開く 戸田

戸田造船郷土資料博物館



安政2(1855)年にロシア人と戸田の船大工の協力によって建造されたヘダ号は、日本で初めての本格的な洋式帆船でした。館内にはヘダ号設計図や大工道具が展示され、建造のきっかけとなったロシアの軍艦ディアナ号の津波による被災から沈没、さらにヘダ号建造にいたるまでの経過が紹介されています。

駿河湾深海生物館

日本一深い湾である駿河湾は深海生物の宝庫です。戸田では古くから深海の魚類やタカアシガニの漁が盛んに行われてきました。生物館には一般の水族館ではなかなか見ることのできない深海魚や深海のカニの標本・剥製を約300種展示しています。



戸田湾内や御浜岬沖での網漁から近海でのカツオ一本釣漁へ、さらにマグロを求めて遠洋へ、戸田の漁業は時代によって漁法や対象とする魚種を変えながら発展してきました。現在では深海底引網漁や沿岸のコザラン網漁、サバやカツオを対象とした近海での巻網漁などに力が入られ、静岡県内では焼津に次ぐ水揚げを誇ります。

「戸田の漁業」のコーナーには、昭和初期の手作りの時代から最近までの漁具や船具を展示しました。伊豆の海から太平洋じゅうを漁場とした戸田の漁師たちの心意気と、少しでも多くの魚を捕るための苦心を感じ取っていただければと思います。



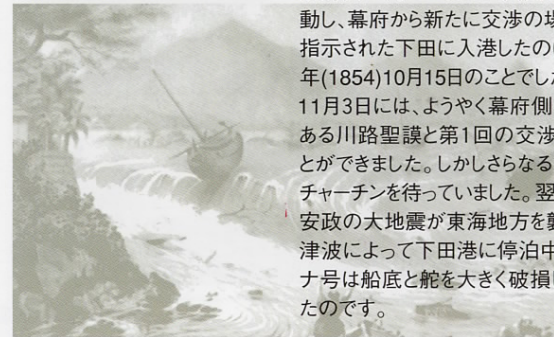
昭和12年御浜岬で行われた網漁

井田集落の南側の尾根上に、6世紀から7世紀にかけて築かれた古墳群があります。当時、海はこの尾根のすぐ下まで入り込み、現在の明神池は入り江となっていたものと思われます。彼らの居住地は北側の井田集落のほぼ全域に広がっていますが、この周囲には古墳の数から推測される人口を支えるだけの水田がなく、彼らの経済的基盤は海にあったものと考えられています。

鳳凰が象眼された
大刀の束頭

日本近代造船発祥の地 戸田

2年の航海の果てに プチャーチンの来航と安政の津波



嘉永5年(1852)、ニコライ一世の命を受けたプチャーチンは、日本との国交交渉に望むべくロシアを出発しました。大西洋を南下、喜望峯をまわって、翌年に長崎に入港しますが、ここでの交渉ははかどりませんでした。いったんロシア領の沿海州に向かい、さらに函館、大阪と移動し、幕府から新たに交渉の場所として指示された下田に入港したのは、嘉永7年(1854)10月15日のことでした。11月3日には、ようやく幕府側の代表である川路聖謨と第1回の交渉に臨むことができました。しかしさらなる試練がプチャーチンを待っていました。翌11月4日、安政の大地震が東海地方を襲い、その津波によって下田港に停泊中のディアナ号は船底と舵を大きく破損してしまっただけです。

双頭の鷲は富士を見たか ディアナ号駿河湾に沈む

傷ついたディアナ号は戸田で修理されることになり、伊豆西海岸を北上しましたが、強まった風と波のため戸田港には入ることができず、現在の富士川河口近くまで流されていきました。約五百名の乗組員は、地元漁民の助けもあって全員無事に上陸することができました。ディアナ号は再び戸田に向け、今度は地元の漁民が漕ぐ多数の小舟によって曳航されはじめました。しかし再び西風が強まり、引き縄を外されたディアナ号は船首を天に向け、駿河湾に沈んでいったのです。ディアナ号の船首にはロマノフ王朝の紋章である双頭の鷲が飾られていました。双頭の鷲は今、プチャーチン家を引き継ぐ子孫の紋章にもなっています。



プチャーチン家の紋章



ディアナ号の模型

技術が言葉の壁をこえる 日本初の洋式帆船ヘダ号の建造

船を失ったプチャーチン一行は、戸田でロシアへ帰るための船を造ることになりました。品川台場を築造した葦山代官江川英龍が建造取締役役に指名され、戸田では名主や廻船業を営む有力者が「造船御用達」に、そして船大工たちが「造船世話掛」に任じられました。ディアナ号から運び出された「スクーナー型」といわれる帆船の設計図をもとに、ロシアの技術者と近隣の村々からも加わった船大工たちは、言葉や長さの単位の違いを乗り越え、わずか3か月で100トンほどの帆船を造りあげました。船大工たちのすぐれた技術と道具は、作業の間じゅうロシア人たちを驚かせていたといえます。そして、これが日本で造られた初めての本格的な洋式帆船となりました。

「集まり散じて」 造船技術の系譜と戸田の船大工

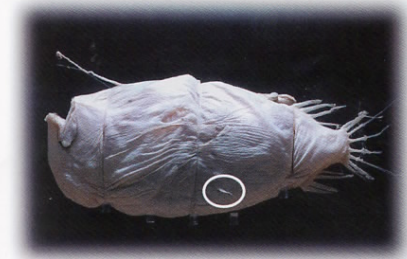
無事に進水した船はプチャーチンによって「ヘダ号」と命名され、一行はロシアに帰っていきました。ヘダ号と同じタイプの船(「君沢型」)は、その年さらに戸田で6隻が建造され、幕府によって佐渡や函館に配備されました。山口県
ヘダ号建造にかかわった船大工たちは、長州藩(広島県)や田原藩(愛知県)などに招かれ、各地で造船技術の普及と指導にあたりました。江戸の石川島にあった水戸藩の造船所でも、戸田の船大工によって君沢型の帆船が建造され、その後の石川島造船発展の基礎が築かれました。戸田の船大工の一人、上田寅吉はその後、長崎伝習所に学び、さらにオランダ留学を果たし、幕府が購入した開陽丸に乗艦して帰国します。新政府では横須賀造船所の初代職長となり、日本海軍初期の軍艦を建造しています。



ヘダ号の模型 右はプチャーチンの胸像 左の旗はロシア国旗

駿河湾深海の主役たち

日本海溝の先端が入り込む駿河湾は、南端での深さが2500mもあり、多くの深海生物が生息しています。戸田の代名詞にもなっているタカアシガニをはじめとして、ラブカ、サケガシラなど、ほとんど太陽の光がとどかない世界にすむ深海生物たちのユニークな姿をご覧ください。

太古のサメの姿を伝える
「生きた化石」ラブカオスを腹部に寄生させた
ミツクリエナガチョウチン
アンコウのメス
(○印の中がオス)

体長2.9m・体重30kg サケガシラ



脚を広げると3m!世界最大のカニ タカアシガニ